

## これからも姉弟

六年 伊藤仁成

ぼくはひとりっ子です。でもぼくには、少し毛深くて可愛いお姉ちゃんがいます。ぼくが生まれる一年前にうちにやってきたトイプードルのモコです。ひとりっ子だったモコは、ぼくが生まれてお姉ちゃんになりました。お母さん達は、モコが赤ちゃんのほくにやきもちをやくんじやないかと心配したそうです。でもモコは、ぼくの顔を見に来た親せきや他の大人から守るように、いつもぼくの側にいてぼくの足の裏や手をなめてくれました。

それからぼく達はいつも一緒です。モコとぼくはカニカマが大好きで、本当は人間の食べ物を食べさせてはいけなけれど、特別な時に少しだけ一緒に食べました。たくさん食べられないモコのために、お母さんがカニカマを割いてモコとぼくの口に少しずつ順番に食べさせてくれるというゲームをしました。モコはちゃんと順番を守れます。でも、わざとぼくに続けてくれようとすると、前足でチョイチョイと自分の番だとアピールしてきます。それが可愛くて何度もモコの番を飛ばして遊びました。モコが食べ過ぎないためにもちょうどいい遊び方でした。

モコは、いつも元気いっぱいでしたが、去年の九月、モコの体に急性白血病が見つかりました。余命四ヶ月でした。ぼくはショックで、病院の帰り道、車で大泣きました。モコにとってどうするのが一番いいか、家族でたくさん考えて、抗がん剤治療を受けることにしました。副作用でだんだんモコのふわふわな毛が抜けてきて、地肌は黒くなって、嘔吐やゲリもたくさんしました。それでも調子が良い時は、散歩に行ったり、魚つりに行ったり、カニカマゲームをしたりして楽しく過ごしました。見た目は変わってしまったけど、やっぱり可愛くて、このままだってでも一緒にいたいと思いました。フードが食べられなくなってきた時には、お母さんと一緒にササミやレバーや小松菜で、モコの離乳食を作りました。そうしたらいつもよりたくさん食べてくれて、このままもって元気になるかもしれないとウキウキしました。

モコが十三才になって数日後のある夜、ねる時間になったので、二階に行くよーとモコをだいて二階に行きました。モコは、二階に用意していたお水をペロペロとなめたすぐ後、とつぜん大きく吐いて、次の日のお昼前、静かに虹の橋へ行ってしまいました。

とつぜんの別れに、ぼく達はたくさんたくさん泣きました。余命四ヶ月だったモコは、頑張つて八ヶ月生きてくれました。ぼく達にとって、とても大切な時間でした。ぼくが生まれてから見てきた毎日、楽しい事も悲しい事もモコと一緒に思い出です。だから、いきなりは受け入れることができません。これからも今まで通り、モコを側で感じながら、楽しく元気に生きようと思います。ひとりっ子ではなく、モコの弟として今まで通りに。